

図形楽譜を用いた総合表現の可能性

和田 幸子

I. 実践の背景と目的

乳幼児は五感で感じた心情を、声、身体の動きを同時に用いて表現する。子どもは心の動きを、自分の身体と身の周りの素材を使って総合的に表現する。それを受け止め、子どもと応答的な関わりを楽しむことは保育者の資質であり、保育者養成校はこの感受性を育む授業づくりに努める必要がある。

以前には「音楽リズム」「絵画制作」「健康」といった領域で示されていた表現に関する内容を、幼稚園教育要領、保育所保育指針において「表現」の領域で総合的に捉え育むことを明らかにしてから早30年が経つ。しかし未だに保育者養成教育においては「表現」を音楽、造形、身体表現に分けて学修し、保育内容「言葉」は別授業で実施されており、子どもの総合的な「表現」を引き出すような学修内容にはなっていない。

そのような中で、子どもの創造的な表現を支える感受性を拓くために、総合的な表現の授業の試みが続けられている。近年の音楽表現から総合表現へと広がっていった事例では、お話の効果音づくりに取り組んだ授業（田中 2016）、造形および音楽表現から総合表現へ広がっていった事例には、音と色・形を連動させた授業（山野・岡林・ガハプカ 2010）が見られる。

本学こども教育学部は平成27年の設立に際し、各領域の専門性を基盤として、領域を縦断的に連携させたクロスカリキュラムでの総合表現の授業内容、授業計画を検討してきた。「造形表現」と「身体表現」を連携させた科目「保育内容Ⅴ（総合表現Ⅰ）」、および「音楽表現」と「言葉表現」を連携させた科目「保育内容Ⅴ（総合表現Ⅱ）」を2年次の履修科目とし、さらに音楽・造形・身体・言葉、すべてを連携させた「保育内容Ⅴ（総合表現Ⅲ）」（以下「総合表現Ⅲ」とする）を4年次科目として設け開講した。これらの「総合表

現」の授業では、身近な自然やものの音・色・形・感触などを味わい、その時の心の動きを総合的に表現することを目指した。

平成30年度4年次対象に実施した「総合表現Ⅲ」の授業は造形表現、音楽表現、身体表現を専門とする3教員が担当する授業として次のように展開した¹⁾。履修生37名を6グループに分け、グループ活動を重ねた。

まず第1段階では3回に渡り、3教室に分かれて、それぞれの教員が「素材（造形表現）」「声・音（音楽表現）」「動き（身体表現）」の活動のワークショップを実施した。第2段階では合同で、領域を重複させた活動として①第1段階の「素材（造形表現）」で制作した「手触りの散歩道」を並べて一つの流れをつくりそれをもとに身体、声、音を用いた創作発表をする、②オノマトペを約20cm四方の色画用紙に描画と造形で制作し、つなげて「オノマトペ譜」を制作、③「オノマトペ譜」をもとに声、身体で表現した。第3段階は総合表現創作に向けてグループ活動をした。室内には大布、オーガンジー生地、リボン、紙テープ、色綿ロープ、カラーボールなどの手具、ボディソックス、レインツリー、トーンチャイム他、楽器を置き自由に触れ、創作のヒントを得やすいようにした。このように表現創作に取り組み、授業内中間発表を経て、幼稚園児を招いての発表会を企画、開催した²⁾。第2段階、第3段階は保育実習室で行った。

本稿では6つのグループ活動より、きみどりグループによる図形楽譜『○の話』をもとにしたグループ創作過程と成果、学生の振り返りに焦点をあてる。表1の色がけ部分である。他のグループが言葉あそびやオノマトペといった声、音の表現素材をもとに表現創作をはじめたのに対し、きみどりグループが選んだ図形楽譜は、声、音、身体の動きといったそれぞれの表現素材をどのように用いるのかという一からの創作過程

表 1) 平成 30 年度授業「総合表現Ⅲ」の内容と展開

	回（日）	内 容					
	1(4/5)	ガイダンス 授業の目標の説明・グループ分け					
第 1 段階	2(4/12)	「素材（造形表現）」		「声・音（音楽表現）」		「動き（身体表現）」	
	3(4/19)	「動き（身体表現）」		「素材（造形表現）」		「声・音（音楽表現）」	
	4(4/26)	「声・音（音楽表現）」		「動き（身体表現）」		「素材（造形表現）」	
第 2 段階	5(5/15)	①「手触りの散歩道」を並べ、それをもとに身体、声、音を用いた創作発表 ②「オノマトペ譜」を制作					
	6(5/17)	③「オノマトペ譜」をもとに声、身体で表現					
第 3 段階	7(5/24)	きみどり グループ創作	き グループ創作	あか グループ創作	みどり グループ創作	ピンク グループ創作	オレンジ グループ創作
	8(5/31)	きみどり グループ創作	き グループ創作	あか グループ創作	みどり グループ創作	ピンク グループ創作	オレンジ グループ創作
	9(6/7)	きみどり グループ創作	き グループ創作	あか グループ創作	みどり グループ創作	ピンク グループ創作	オレンジ グループ創作
	10(6/14)	作品の中間発表と他グループの鑑賞					
	11(6/21)	きみどり 修正・改善	き 修正・改善	あか 修正・改善	みどり 修正・改善	ピンク 修正・改善	オレンジ 修正・改善
	12(6/28)	司会進行・プログラム作成・作品解説作成、の 3 つに分かれて活動する					
	13(7/5)	進行も含めた全体でのリハーサルを行う					
	14(7/12)	幼稚園 3 ～ 5 歳児を対象として発表する					
	15(7/19)	振り返り・まとめ					

が必要となった。本稿できみどりグループを取り上げる理由はここにある。本稿の目的は、図形楽譜を手だてにして学生が総合表現に立ち上げていくことの可能性を提示することである。

Ⅱ. 図形楽譜『○の話』を用いた創作表現

1. 図形楽譜『○の話』について

図形楽譜とは、作曲家がその作品において演奏者に要求する音響形態、音響形態の算出方法としての演奏行為などを、伝統的な五線記譜法とは異なる記号や図形によって表記した楽譜である³⁾。1950 年代初頭に起こり、その由来は楽音以外の自然音、雑音も用いて音楽創作する作曲技法による。

図形楽譜『○の話』⁴⁾は、オルフ・シュールベルク⁵⁾音楽療法実践家のためのワークショップとして紹介されたものである (中島・山下 2002)。読み解きは演奏者に任されており、この図形楽譜の上、下、または横、いずれから読み始めてもよい。主に声、音で表現することを想定して描かれたものであるが、動きをつけて総合表現とすることもできると考えた。

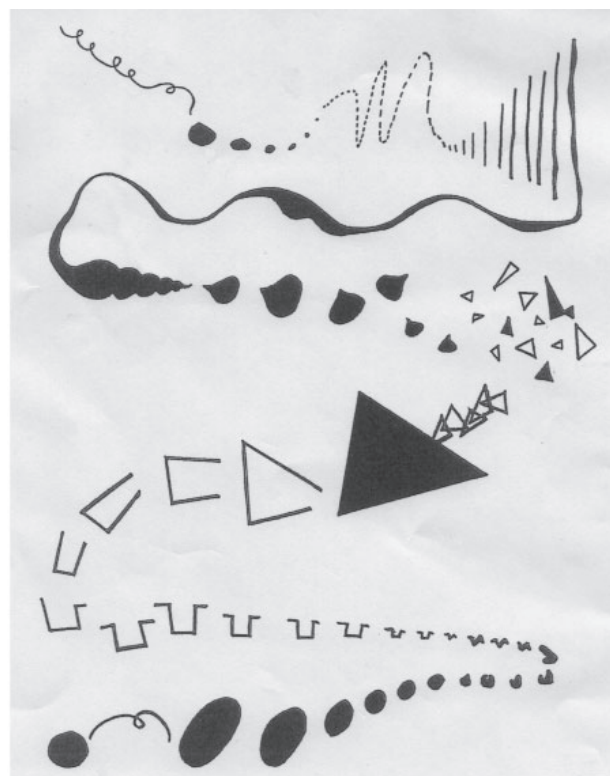


図 1) 図形楽譜『○の話』 (中島・山下 2002 より)

筆者ら3教員は、第3段階のグループでの総合表現創作に向けて、総合表現のモチーフとするための絵本、歌、そしてこの図形楽譜の計6つを提示した⁶⁾。絵本は言葉遊びやオノマトペを含み、デザイン、色に特徴のあるもの、歌も言葉遊びを歌詞としたものであった。きみどりグループは図形楽譜『○の話』を選んだ。

2. 図形楽譜『○の話』をもとにしたグループ創作過程

きみどりグループによる『○の話』をもとにした表現創作過程をグループワークシートと筆者の記録から以下にたどる。

(1) 5/24 グループ創作の様子

きみどりグループが図形楽譜『○の話』を選んだのは、「何にも縛られず表現できる」と考えたからとのことであった。6人での相談は、会話が弾み、図形楽譜の読みとりと意味づけを楽しんでいるようであった。6人が丸くなって座り、中心に図形楽譜を置いていた。それぞれの学生は自分の位置から見える図形楽譜の形を眺めていた。どの位置から見てもこの図形楽譜は「おばけ」みたいに見え、この図形がたどる線は「散歩道」に見える、と言う学生がいた。グループワークシートの創作テーマ欄には「おばけのぼうけん」と記入しており、グループ創作活動1回目ですでにテーマとイメージが共有されたことがわかる。また、室内に用意した楽器を次々とさわり、音を出してみるのも他のグループより早かった。「後ろで音（楽器）を鳴らす」と記し、メンバー一人を楽器担当としようと考えていたこともわかる。各自の振り返りシートには「いろいろな見方ができることを知った」とあるように、グループ内での相談が活発にでき、意見を聞いてもらえたことを喜ぶ姿や、「文字のない作品を選んだからこその良さを出したい」とグループ創作表現に意欲的であることが感じられ、グループ創作が順調に滑り出したようであった。

(2) 5/31 グループ創作の様子

図1の図形楽譜を左上の渦巻き模様からたどって読んでいくことになった。左上の渦巻き模様から太い波線型までを①、巻き貝形から中央の黒三角形までを②、角の閉じていない三角形から最後までを③のセクションとし、各セクションを2人ずつで担当して表現のモ

チーフ案を考えることにした。

表2) 図形楽譜内のセクション

セクション	図形楽譜『○の話』での位置
①	左上の渦巻き模様から太い波線型まで
②	巻き貝形から中央の黒三角形まで
③	角の閉じていない三角形から最後まで

例えば、①はオーガンジー布にボールを載せて転がす、2mのレインツリーを床から水平に持ち上げ、片側の体側を伸ばしレインツリーを垂直にして中味の粒音が消えるまで待つ。そしてもう一方の体側を伸ばし、再びレインツリーを垂直にして中味の粒音が消えるまで待つ、ということを繰り返した。太い波線部分は紙テープを持ってなびかせ、波の音がする楽器はないかと探っていた。②は丸い形が小さい三角形に変形するイメージの物を見つけようとしたが、室内にある物では見つけられず、③は横歩きの動きをするなど試していたが、ぴったりとする案が見つけられずにいた。6人で進捗を共有した後、各自の振り返りシートには「物や楽器に頼りがちになりがち」「物に頼らずに体や音を入れて考えるのが難しい」と記し、図形楽譜の図形を物や楽器に当てはめて表現させている現段階に違和を感じていることが読みとれた。

(3) 6/7 グループ創作の様子

前回考えが進まなかった②の部分考えた表現モチーフ案の記録は図2のようであった。

「風船がふわんふわんと飛んでいき、ぱちんと割れたら中から小さい三角形の紙吹雪が出てきた。三角形が重なり連なり、大きな黒い三角形が登場した。」という物語をつくり、それを表せる道具を探そうとしていた。そのために風船を使ったり、ボディソックスを着て手を伸ばし、外から見て三角形に見えるようにするなど、具象物で表現するようになっていた。

③のセクションでは「ひらがなのひに見える部分がある」との意見を拾い上げ、「ひひひひ、ひひひひ」とおばけがささやきながら横歩きをするように表現することになった。図形楽譜から感じた心の動きを表現してほしいと願っていた筆者は、「ひひひひ、のおばけの踊りがおもしろい」とコメントした。

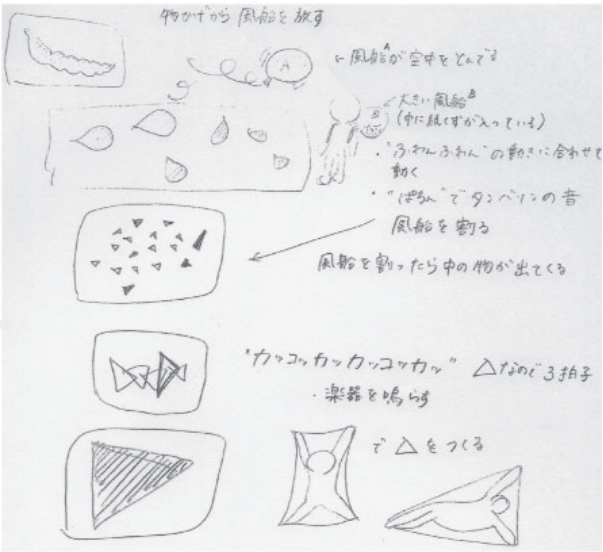


図 2) ②の部分の読み解き

(4) 6/14 中間発表と振り返りの様子

未完のまま迎えた中間発表は、セクションのつながりが留まるなど、スムーズにいかなかったが、最後までとおした。これは自分たちでも予想外であった様子で、「グダグダになりました」と各自の振り返りシートに記録していた。

グループワークシートには「ひひひひ、が面白い」「カラフルだがモノの使いすぎ?」「動きがあいまい」「静かなところから大きな音に変わるのが面白い」と自己評価を記していた。また「全体でのつながぎをはっきりと」「物の制限」「身体での動きをもう少し増やす」を課題として挙げている。

(5) 6/21 修正、改善の様子

中間発表の振り返りを基に大幅修正に取り組んだ。中間発表の動画記録を見て、「ごちゃごちゃしているので、音の大小と動きの大小を連動させてわかりやすくする」と改善点をあげ、表現を作品として整理した。そして使用する手具を減らしていった。

(6) 発表会を迎えるまでの様子

6/28 の、発表会進行企画準備の合間にも、きみどりグループは集まってはアイデアを出し合い、確認していた。課外の時間にも集まって練習をしていたようである。最終的に各セクションの表現は表3のようになった。

表 3) 各セクションの表現

セクション	表現モチーフ
①	・くるくると舞い降りてきて着地する ・レインスティックの動き、中の粒が落ちる音を聴きながら、両手を横に広げて体側をゆっくり伸ばす ・横歩きで移動し、子どもたちの近くへ行く
②	・2人で伸ばした腕を時計の針に見立て時を刻む様を表す
③	・「ひひひひ」と言いながらリズムを作って横歩きで子どもたちのところへ近づく ・一旦床に伏し、一人ずつくるくると回りながら退場する

3. 図形楽譜『○の話』をもとにした創作表現の発表

きみどりグループは、各自、黒の上下服を着用し、白ケープを肩にのせ、約 50cm のスズランテープを割いたものを指に巻きながら登場した。楽器担当者は電子ピアノの前に座り、動きにあわせて鳴らしていたが、同じく立って動きながら鳴らす場面もあった。創作表現発表は3分 25 秒間続いた。

使った手具はオーガンジー布、スズランテープ、楽器はトーンチャイム、レインツリー、ウッドブロック、ロリポップドラムであった。セクション①②③の表現と子どもたちの位置を図3で、創作表現の展開を表4で表す。

幼稚園児を招いた発表会当日は会場設営、運営、司会も担い、気持ちを高くして臨んでいた。きみどりグループの表現の最中には「何してんの?」と声を発する子どももいたが、変化していく表現に笑い声も生じた。子どもたちの席のほうへアクションを広げると「わあー」と声をあげ、「カッチ、カッチ」と言いながら腕を回していく部分では「とけいや」という子もいて、子どもたちの様子を感じながらすすめた表現発表であった。

学生の振り返りシートでは、「子どもたちの新鮮な声や反応を見れてよかった」「意外なところでの反応があった」「子どもに助けられた部分が多かった」のように、子どもたちの存在がモチベーションになっている様子である。「もっと声を出せばよかった」という振り返りは、自分たちの表現が子どもたちに届かなかった部分もあると理解しているからであろう。

表 4) 創作表現の展開

時間	セクション	イメージ	表現の実際	楽器・手具
0:00	①	・くるくると舞い降りてきて着地する。	・くるくると回りながら一人ずつ登場して身をかがめて座る。その際、楽器担当者がトーンチャイムで4回、同音を鳴らす。	トーンチャイムE音、A音、c音、d音
0:30		・長い棒を持って散歩する。	・両腕を左右に上げたまま、右、左、とゆっくり体側を伸ばす。その際、後列のメンバー(楽器担当者)がレインツリーを肩の上に担いだ姿勢で同様に交互に体側を伸ばす。レインツリーの中の粒が落ちきるまで音をきく。	レインツリー
1:05		・横歩きで移動する。	・手をつないで横向きに「にゅうにゅう」と言いながら練り歩く。	手に付けたスズランテープ
1:23	②	・時間が経っていくイメージ。	・二人が体を付けて立ち、「カッチ、カッチ」と言いながら一人ずつ腕を時計の針のように動かす。「ピンポン」と言って終える。	ウッドブロック
1:40		・オーガンジー生地を持って移動する。	・3人でオーガンジー生地を持って「ほうほう」と言いながらなびかせて移動する。	オーガンジー生地
1:54		・集まっては散っていくイメージ。	・4人が腰を低くして「ぎゅーっ」と四方から集まり、「ばーん」と言って離れる。これを4回繰り返す。	ロリポップドラム
2:16	③	ひらがなの「ひ」に見える部分。	・手を耳の横で動かし、「ひひひひ」と言いながら横歩きする。一人から二人、三人、四人と増えていく。「ひ～」と言いながら一旦床に伏す。トーンチャイムの音と共に一人ずつ起きあがり、くるくると舞いながら退場する。	トーンチャイムE音、A音、c音、d音
3:19			・楽器担当者が楽器箱を持って「ひひひひ」とい	楽器箱
3:25			いながら横歩きで退場する。	

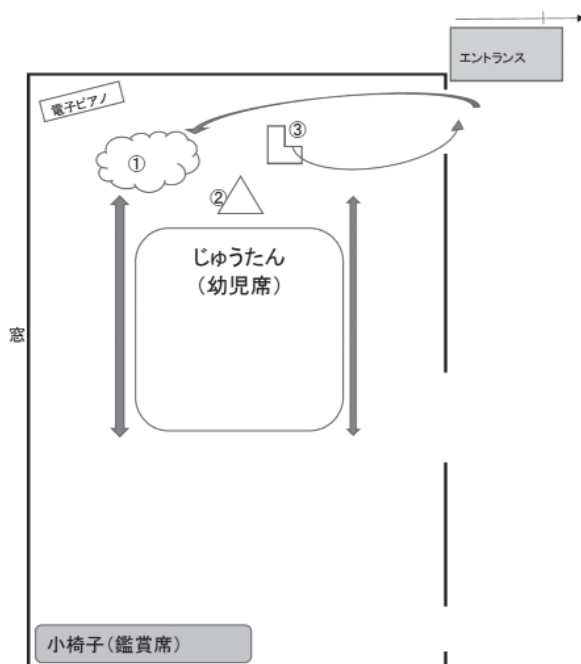


図 3) きみどりグループ表現発表と幼児席

Ⅲ. 『○の話』をもとにした表現創作の可能性

1. きみどりグループの表現の特徴

きみどりグループの表現創作過程をグループワークシートからたどると、「いざ表現となるとヒントのなさに途方に暮れた」と振り返っている。そのような中から少しずつできあがっていったきみどりグループの表現創作の特徴は、(1)おばけのぼうけんというイメージの明確化、(2) 声と身体の動きを活かした表現であると考えられる。下記に考察する。

(1) おばけのぼうけんというイメージの明確化

グループでの話し合いの中で、この図形楽譜全体が「おばけ」のように見え、図形がたどる線は「散歩道」に見える、との意見があった。そして、「散歩はおしゃべりしながら歩く」との気づきが学生にあった。散歩というのは、方向を定めて、ある距離を時間をかけて歩き、そして戻ってくる行為である。つまり、散歩というイメージを持つことによって、その表現は方向性、空間性と時間性を含むものになり、表現が立体的に立ち上がってきたと考える。

きみどりグループは「にゅうにゅう」「ほうほう」「ひ

楽譜 2) セクション②

♩ = 92

カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ

カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ

カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ カッ チ

ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう ほう

ぎゅー ばーん ぎゅー ばーん

(ロリポップドラム)

ぎゅー

楽譜 3) セクション③

♩ = 72

ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ

ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ

ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ

ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ

ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ

ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ

(トーンチャイム)

ひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ ひひひひ

められないものは、符頭をつぶした音符でおおよその高低で示している。速度はメトロノームを用いて計った。

セクション①はおばけが登場し、ウォーミングアップ

プし、練り歩く場面、②は時間が経過していく中、おばけが悠々と飛んではエネルギーを発散させる様子、③はささやきながら子ども一人ひとりに近づく、そして帰っていく、というそれぞれの意味を表現している。

図形楽譜『〇の話』はモノクロの図形描画であり、文字、セリフは記載されていない。そこから上記のような音程と音価を持った音と声による表現が創り出された。音と声、それぞれのフレーズにはおばけの様子、おばけの気持ちを表そうとしていた。トーンチャイムを順に響かせて、おばけの登場、およびおばけが帰る表現を表しているのだが、響きの濁らない E 音、A 音、c 音、d 音の 4 音を選んでいることも興味深い。

筆者から見て悔やまれるのは、セクション②の「カッチ、カッチ」と言いながら 2 人が腕を回して時計のようにしている場面についてである。時計の針が進む様子を表し、時間の経過を表現しようとしていることが察せられた。しかし、発表会後に 6/7 のグループワークシートを見直した際、②の表現モチーフ案の記録に気づいた。先に図 2 に示したとおりである。そこでは、小さな三角形が集まり、黒い大きな三角形に変化する時間経過を「カッコッカッカッカ」という 3 拍子で表していたのだった。三角形の辺をなぞるようにこの拍子感が生まれてきたと考える。いつの段階で「カッチ、カッチ」と 2 拍子系で表現するように変えたのか、その理由を筆者は把握できていない。きみどりグループ内でも無自覚のうちに変化してしまったのかもしれない。3 拍子で三角形をたどる表現であったなら、異なるイメージの創作表現になっていただろう。

IV. まとめ

学生の記述では「動きながら考えると、図形楽譜を見つめているときよりもずっと多くアイデアが出た」とある。動きながらお互いをよく見て、応答的にやり取りをするプロセスが生じていたのであろう。それをアイデアと受けとめたのだと考える。第 1 段階の「素材（造形表現）」「声・音（音楽表現）」「動き（身体表現）」の経験をヒントにして平面に描かれた図形楽譜を総合表現として立体的に立ち上げていったと考えられる。図形楽譜を用いて総合表現を創っていく本活動は、一定の成果を得ることができたと考えられる。しかし、各領域の専門性に依拠した総合表現という視点で振り返ったとき、まだまだ課題は多いと感じている。声・音の高低、大小、ポルタメントや揺れ、発声法、息の使い方、伝わり方について、多様な経験をする機会をもち、学生自身が声・音を発するときの身体コン

ディションを知り、発する声・音をコントロールしていく力をつけてほしい。そのような声・音を用いての総合表現を目指して授業研究を続けたいと考えている。

注

- 1) 平成 30 年度「総合表現Ⅲ」は智原江美・下口美帆・和田幸子、の 3 教員で担当した。
- 2) この経過は、智原江美・下口美帆・和田幸子（2019）総合表現のこころみ—音・動き・素材の探求を通して—、京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要 57. において報告している。
- 3) 『図形楽譜』（1977）新音楽辞典 楽語、音楽之友社、p.301
- 4) 『〇の話』は音楽療法家のためのワークショップとして、「音にしてみましょう、動きにしてみましょう」という問いかけと共に紹介されている。筆者はグループ活動に際し、総合表現のモチーフとして、『〇の話』を提案した。本稿ではこれを選んでグループ創作表現に臨んだきみどりグループに焦点を当てて報告する。
- 5) ドイツの作曲家、音楽教育家であるカール・オルフ（1895-1982）によって提案された子どもたちのための音楽教育のアイデア。基礎的な音楽は音楽単独ではあり得ず、必ず運動、踊り、言葉がついてくるとの音楽観に立ち、その有り様に添った教育のアイデアを提示した。シュールベルクは普遍的なメソッドではなく、あくまでも一つのアイデアであり、これを参考に各実践者が実践方法を編み出していくように勧めた。
- 6) 下記 4 つの絵本と歌および図形楽譜を提示した。
駒形克己（1999）ごぶごぶごぼごぼ、福音館書店
谷川俊太郎 文・元永定正 絵・中辻悦子 構成（2014）あみだだ、福音館書店
谷川俊太郎 文・元永定正 絵（2008）いろいきてゐる！、福音館書店
元永定正（1999）ぱびゅべー—いろながれかたちうごいて、光村教育図書
おおたか静流（2004）ぴっとんへべへべ、NHK にほんごであそぼ—じゅげむ編、ワーナーミュージック・ジャパン
『〇の話』中島恵子・山下恵子（2002）音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー、春秋社、p.27 より

引用文献

- 田中知子（2016）音楽表現の授業における効果音づくり
の試み－音の素材に着目して－. 関西楽理研究
33.150-164
- 中島恵子・山下恵子（2002）音と人をつなぐコ・ミュージッ
クセラピー. 春秋社. 27
- 山野てるひ・岡林典子・ガハブカ奈美（2010）音楽と造
形の総合的な表現の展開－保育内容指導法（表現）
の授業における『音環境を描く』試みから－
京都女子大学発達教育学部紀要 6.47-59

